



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

## 研究者としての荒井章三先生（荒井章三先生退任記念号）

著者	勝村 弘也
著者別名	Katsumura Hiroya
雑誌名	キリスト教論藻
巻	38
ページ	3-5
発行年	2007-03-10
URL	<a href="http://doi.org/10.14946/00001612">http://doi.org/10.14946/00001612</a>



# 研究者としての荒井章三先生

キリスト教文化研究所 所長 勝 村 弘 也

荒井章三先生に私が最初にお目にかかったのは、1978年の夏、ドイツのハイデルベルクの学生寮においてでした。先生は松蔭からの在外研究でこの大学町に来られた所でした。私の方も留学生としてちょうどこの町に来たばかりで、いずれも宿探しの途中に偶然同じ学生寮のお世話になったというわけです。この荒井先生との出会いは、私の人生にとっての一大事件であったのですが、このことの詳細については別の機会に書かせていただくとして、当時、先生はG・フォン・ラートの2巻からなる大著『旧約聖書神学』の翻訳に没頭しておられ、日本から送られてきた大量の印刷ゲラに朱を入れられていたように記憶しています。言うまでもなくフォン・ラートは、20世紀を代表する旧約学者であり、その影響は神学者のみではなく、ポール・リクルの解釈学にまでも及んでいるような大家です。私は大学院生時代にこの難解な『旧約聖書神学』のドイツ語の原書を図書館で見つけ、英訳と突き合わせながら、文字通り必死で解読したものです。実際に私が読んだのは、その一部だけであったのですが、それを全部訳し終えられてまさに出版されようとしている先輩を地球の裏側で目の当たりにして、「これぞ天の配剤」と思わずにはいられませんでした。

その後、荒井先生とは神戸松蔭で25年間にわたって、まさに兄弟のような交わりをさせていただくことになりました。そのために先生の学問的業績について述べるとなると、これを客観的に述べることは不可能でどうしても体験談のようになってしまうことをお許し下さい。先生の初期の翻訳に同じくフォン・ラートの『旧約聖書の様式史的研究』（1969年）があります。ここに収められたフォン・ラートの諸論文は、研究史上きわめて重要なもののほか

りで、前述の旧約聖書神学の下地を形成するものです。この書物は、やはり私が学生時代に表紙がすり切れるまで繰り返して読みました。現在から見ますと、どの論文にも批判すべき所が多くありますが、聖書学を志すものの必読書である点は変わりません。プリンストン大学の政治学者 M・ウォーザー著『出エジプトと解放の政治学』の翻訳（1987年）は、出エジプト物語がヨーロッパの市民革命時代の政治思想にどのような影響を与えたかを論じる名著です（評論家の加藤周一が新聞などで紹介したこともあります）。聖書のいわゆる影響史（Wirkungsgeschichte）に関する書物ですが、当時は日本の学界では影響史の発想は目新しいものでした。このような分野にも視野を広げておられたことは、荒井先生の教養の広さや深さと無関係ではないでしょう。このウォーザーの著作は、私が出エジプト記関連の講義をするときにはいつも参考にしています。その他、数多くの翻訳書から他に注目すべきものを挙げますと、まず K・コッホの『預言者 I』（木幡藤子氏との共訳）があります。この書物の意義については、近年の学術論文で繰り返し引用されていることから明らかです（私もその一人です）。ユダヤ人哲学者マルティン・ブーバーの名著『モーセ』の翻訳については、書評を書かせていただいたことがありますのでここでは省略します（『福音と世界』2003年2月号）。

後にまとめました先生の主要業績からも明らかなように、大量のすぐれた翻訳書に、荒井先生の研究者としての本領は十分に発揮されていると思います。研究論文（聖書注解を含む）の点数は多いとは言えないかも知れませんが、もちろんそれはあくまでも翻訳や監修、啓蒙的な著作などの業績に比較しての話です。どの論文もドイツの旧約学の主流を形成する歴史的批判的な方法が基盤となっています。この中には、実に荒井先生らしい、慎ましやかな表情をしているものの私たち後続の研究者にとっては、色々と教えられところの多い論考がいくつかあります。例えば「〈わたしの父の神〉とヤハウエ」（1980年）は、研究史上きわめて重要な意味を持つアルプレヒト・アルトの学説によりながら族長たちの信仰を宗教史的に明らかにしたものです。旧約学の主流派に対して批判的な立場をとるものもあります。例えば「イスラエル脱出共同体の辺境性」（1986年）は、ヤハウエ宗教の担い手を社会史

的な観点から考察したもので、旧約の歴史書の解釈に新しい視点を持ち込んでいます。ここでは有名なメンデンホール仮説について実に手際よくその全体像が明らかにされています。このメンデンホール仮説は、すでに関根正雄などによって紹介され高く評価されてはいましたが、たいていの日本の研究者が分かりやすいとは言えないメンデンホールの論文を実際に丁寧に読んでいたのかどうかきわめて怪しかったものです。この意味でこれは後学にはたいへんありがたい論文で、私も「パレスチナの土地」に関する極めて現代的な問題を論じるに際して使わせていただきました。

以上のように荒井先生の学問的業績について簡単にまとめさせていただいた訳ですが、最後に一言付け加えさせていただくことがあります。それは、本学が継続して収集している「ユダヤ学」関係の資料についてです。すでに故人となられた森田雄三郎先生との共著『ユダヤ思想』やマルティン・ブーバーの著書『モーセ』の翻訳出版が物語っているように、荒井先生は、キリスト教神学の枠を越えたところでのユダヤ思想全般への強い関心を示しておられます。学問としての「ユダヤ学」はホロコーストによって一旦はほとんど消滅してしまいましたが、特に20世紀末からイスラエル、アメリカ合衆国、ヨーロッパ諸国などを中心に世界的な規模でその復興がなされています。この分野の文献は、我が国では大阪大学などでもかなり収集されてきましたし、昨年からは同志社大学に「ユダヤ学」研究室も生まれています。しかしながら、私の知る限り、本学ほど組織的にこの分野の文献を収集してきた研究機関は我が国に見当たりません。これは研究者としての荒井先生に「先見の明」があったからこそ可能であったことだと思います。この宝の山を今後の研究に生かすことが、後学の使命であると確信いたします。

荒井章三先生の内外におけるますますの御活躍を祈願しつつ、この論集を御退任記念号とさせていただきます。

2007年1月30日